

シンポジウム 1：学生時代から行う国際交流の意義

2. 20 年に及ぶ台湾姉妹校との交流・海外研修旅行の意義

山 藤 賢*

〔Key Words〕昭和医療技術専門学校、海外研修旅行、台湾

はじめに

今回、第 11 回日本臨床検査学教育学会学術大会において、坂本秀生大会長より、シンポジウムの講演依頼をいただいた。「学生時代から行う国際交流の意義」というテーマについてだが、その中で二つほど内容として話してほしいとのリクエストであった。一つは、私自身がチームドクターとして経験した、なでしこジャパン(サッカー日本女子代表)などでの海外活動や、そのマネジメントなどを通じた世界との関わりについて。またもう一つは本題である、本校において毎年行っている、台湾研修旅行の意義についてである。講演では写真なども多用したので、そのままの形での表現、執筆は難しいが、要点について述べたいと思う。

I. 海外帯同における医療の役割や、その経験について

私自身の経験を振り返ると、日本サッカー協会より依頼を受けて、男子・女子各世代の代表チームの帯同ドクターの仕事を通して、様々な国へ行かせていただいた。オリンピックやワールドカップはもとより、その予選ともなると、ホーム&ア

ウェーという試合形式の中では、様々な国へ出向かざるを得ない。アメリカ、ヨーロッパ、中南米、東アジア、中東・・・、様々な大陸に、数えれば 15 カ国以上の海外遠征経験がある。その中で、一番の財産は、後ほど述べる研修旅行の意義と重ねると、「体感」であると思っている(写真 1)。もちろん、メディカルスタッフとしては、知識は必要で、事前の準備も大事なのだが、実際の現場はそれだけではまわらない。やはり、その土地によっても独特の文化によっても、状況は変化する。それを知識として知っているだけ、経験しただけ、ではなく、そこで自分が何を感じたか、また何を感じるかという感覚が、次につながる体験となり、知識に結びつくと思っている。思わぬ疾患に見舞われることもあれば、予期せぬ感動に出会うこともある。サッカーに限らず、オリンピックの選手村などでは、普段は会うことのできないような、ボルト選手のような歴史に残る偉大なプレーヤーの日常に出会えることもある(写真 2)。そこには、失敗や感動の繰り返しがあり、その「体感」が自分自身を成長させてきたのではないかと思う。今回の講演においては、結論的にこの「体感」に繋がるような流れで、次の台湾研修について話させていただいた。

*昭和医療技術専門学校 sando@kj9.so-net.ne.jp



写真1 なでしこジャパン初の
アジア金メダル

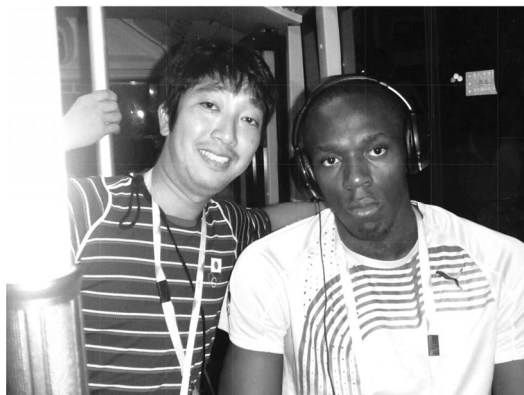


写真2 陸上短距離3大会連続3冠の
ウサイン・ボルト選手と
(北京オリンピックにて)

II. 台湾研修旅行について

昭和医療技術専門学校では、1996年より毎年、第2学年次に台湾への研修旅行を行っている。その歴史は20年に及ぶ。その間には、現地の臨床検査技師養成校である「中台科技大学」と姉妹校の締結を行ったり、向こうの学生が本校を訪れ、交流をしたこともある。また東日本大震災の際には、本校に向けたたくさんの激励のメッセージを、動画でYou Tubeを使って配信いただいたりと、とてもあたたかく深い関係を築いている。訪問時には、現地では中台科技大学にて学生、教員を含めた交流会を行うのが一番の大きなイベントであるが、他にも、年によって、台湾の臨床検査分野で活躍する著名な先生の講演を賜ったり、現地の学生による文化的施設などの個別の案内や、本校学生のみで自由に研修場所を調べ行動するような機会も設けたりしている。もちろんベースにある観光として、中正記念堂や九份、十份などの著名な観光地も訪ねるが、衛兵交代や夜市の体験、龍山寺、故宮博物館などの見学を通して、現地の歴史や文化にも触れる。台湾研修旅行の目的は、時代に合わせて変化もしてきているが、毎年その意義を確認しながら、内容をアレンジし、細かい変更を続けている。学生交流会においては、私と姉妹校校長の両学校長による両校学生への講演時間、



写真3 本校学生と台湾学生との交流会

記念品交換会などもあるが、学生同士で過ごす時間を主に多く取っており、レクリエーションや共にとる昼食などを通して、異文化交流が盛んに行われている(写真3)。

III. ま と め

それでは、海外研修旅行の一番の意義とは何であろうか。先ほどの海外遠征の帯同ドクターの話とも繋がるが、現在、私自身は、「多様性の体感」ではないかと考えている。昨今の本校学生は、海外に行った経験がある者が非常に少ない。昨年は約3分の2の学生がパスポートの取得から始めて、

初の体験であった。その体験で感じた「感覚」が大事なのではないかと思う。皆さんも経験がおありだと思うが、海外の空港に降り立つとその国独特の「におい」のようなものを感じる。その土地の空気、食事の味、雰囲気、人のあたたかさ、そのようなものは、インターネットでその国を調べ、いくらわかったような気になっても、「体感」していない以上、「経験」にはならない。一番大事なものは、この「経験する」ということであり、私自身は「肌感覚」という言葉で表現するのが好きである。

では、この「体感」が何に繋がるのか。我々がこの世の中で幸せに生きていくためには「知恵」が必要である。私が大会長を務めさせていただいた第9回日本臨床検査学教育学会学術大会にて講演くださった東京大学先端科学技術研究センター教授の西成活裕先生が、先日対談で、知恵＝知識×経験だということをおっしゃっていた。本当に至言だと思う。知識だけがいくらあっても意味はない。そこに経験を加えて初めて知恵になるのである。昨今は、知識や資格だけで満足する若者も多く、また教育者自身もそう信じている方が増えているのではないだろうか。しかし、そこには、経験、行動が伴わなければ、「生きていくための強い力」は決してつかない。

実際、台湾の学生交流において人気の学生は、英語が出来る学生でも、北京語が出来る学生でもない。身振り手振りでも筆談でも、必死にコミュニケーションを図ろうとする学生である。本校では、現在、「日本語表現法・思考法」という1年次～2年次にかけての講座で、様々な方法で自己表現をする機会が数多くある。そのような講座もこの経験の意味に繋がっており、日本語でもコミュニケーションが取れない学生がいくら外国語が出来ようとも、何度も海外経験があろうとも少しも国際化にならない。社会人も同様であり、それでは、ただの知識であって、現場で使える「医療人」にはならない。人と繋がれなければ意味はない、大事なものはそれに気付くことである。そのためには体験すること、感じること、「体感」が大事なのではないかということである。そこで身に

ついた「知恵」それを生かすことがその後社会に出てからも大事になってくるのである。

それと、当日フロアーからも質問があったが、「学校教育」としてこの研修旅行において大事にしている考えがある。それは、希望者や行ける人が行くというのではなく、「全員で行く」ということである。希望するしないだけでは、それはやりたいことをやっているだけであり、想定を超えた経験、感動に結びつかない。個人旅行と変わらなくなってしまう。誤解を恐れずに言えば、やはり、そこには学校である以上、「学び」「修行」という要素があるべきである。団体行動の中での規律や、そこで気付くこと、仲間との繋がり、絆、そのようなことも学校教育の中では育むべきと考えている。私見にはなるが、若いうちには大いに修行するべきと思う。それが「生きる力」の強い若者を生むと思うし、教育者、大人がそこに導く責務もあると考えている。なぜなら、医療という「命」に係わる現場で活躍する臨床検査技師は、自分自身を律するために「強く」なければならないし、その意味ではこの研修旅行は、自分自身を大きく伸ばす、とても重要な機会であると思っている。

ただし、これもフロアーからの質問にもあったが、海外研修には、メリットもデメリットもつきまとう。メリットとしては、上述した、未知の体験、チャレンジなどがある反面、デメリットとしては、例えば費用の問題や事故・病気などのリスクもある。また実質的な勉強面での結果も問題となってくる。講演の際にも述べさせていただいたが、本校では幸いにして、ここ4年間、国家試験においては、最高学年において一人の留年生も出さずに全員が受験し、そして100%の合格率が続けている。もちろん、努力だけではない、運や体調、様々なファクターが国家試験には絡むが、それでも、勉学的な結果と研修が結びついているという概念が学校側になれば、その責任を負うことはできないし、その意義について説明することもできない。

そこまでのリスクもありながら、本校が全員参加で研修旅行を続けている理由は何なのか。それ

こそが、学校長である私自身が「これからの時代を生き抜くためにそれが必要だから」と考えているからである。臨床検査技師という枠だけで完結する世界観は凄く小さなものである。その外には医療人という枠があり、社会という枠があり、地球、自然、宇宙という枠がある。その世界観を体感し、臨床検査技師という枠に戻ってこれる者は、より一層大きな臨床検査技師としての価値観を手に入れることが出来ると思っている。チーム医療という概念の中でも多様性を持った医療人が必要とされる。そのためには、安心な世界観だけに触れているだけでは広がりには生まれない。だからこそ、一歩踏み出した「冒険」が必要なのである。

もちろん、冒険、経験にはリスクが伴う。しかし、それを乗り越えて行動していくことに最終的には研修旅行の存在意義はあるような気がする。現地学生とのお別れのときには、皆、涙を流して別れを惜んでいる。現地ガイドさんから台湾という国の成り立ち、そこで生きていく「自分」という存在の話を聞くと、学生はやはり涙する。そこで感じるのは、我々が日本人であるという強いアイデンティティーである。真のグローバルゼー

ションというのは、外国語を覚えることでも、海外に行くことでもない。ましてや海外文化を迎合することでもない。我々が自分の存在、自分達の文化を大切にし、それを外向きに発信し、世の中を豊かにすることと考える。

これからはAI、IoTの時代と言われている。その中で、人間にしかできないことはなんだろうか。前述の西成活裕先生は、一つはユーモアと、もう一つは矛盾を抱えたまま前に進む力とおっしゃっていた。繰り返しになるが、必要なのは、知識でも経験だけでもない。知恵が必要である。そのためには、『私「が」生きた』という感覚。そのような拠り所を自らの経験の中から作っていく必要があるのかもしれない。

だからこそ、体感、冒険の必要性であり、「現代」における「全員参加」での「学校行事」としての研修旅行の意義であると考えている(図4)。

これからも、時代に合わせて変化を続けながら、毎年、研修旅行は自分たちで創り上げていかねばならない。なお一層の皆様からのご指導ご鞭撻をいただけたら幸甚である。



図4 中台科技大学にて、教員、学生も交えた集合写真